

ベートーヴェン：交響曲第6番「田園」第4楽章「雷雨と嵐」
C1へ09124 篠崎所蔵

今号の特集テーマのひとつ「雷」で思い出すのがこの曲です。田舎の生活を描いたといわれる「田園」ですが、実は私が最初に聴いたのは映画「ファンタジア」的一幕。必然的に第4楽章の雷雨のイメージもディズニーのアニメーションと固く結びついてしまいました。具体的に言うとゼウスが雷を落としまくっているという……。まっさ

らな状態で聴いてみたかった気もしますが、そもそも映画がなければ「田園」を聴いたかどうかとも怪しいところなので「まあいいか」と思っています。ちなみに曲の好みとしては第4楽章の嵐が徐々に遠ざかり、光が見えてくる第5楽章への流れに美しさを感じます。

スタッフのセレクション!

世界一うつくしい植物園

木谷 美咲著 エクスナレッジ 470キ 篠崎ほか所蔵

一歩足を踏み入れた瞬間、「ここは天国だろうか!？」と思った。

ふんわりと身体を包み込む甘い香り、しっとりとした南国の空気、そして目の前いっぱいに広がる緑……。さまざまな種類の植物達が、あちらで優しく手招きしている。外は真冬の寒さでも、温泉の熱を利用したガラスの温室の中は暖かい。「熱川バナナワニ園」、日本にこんな場所があるとは驚いた。寒さと乾燥で完全に縮こまっていた私の心と身体が、一気にふわっとほどけた気がした。素晴らしい温室の中でとりわけ美しいのが熱帯スイレン室だ。私は蓮の花が、驚くほど種類が豊富で色も形もさまざまなこと、そして香りがとても良いことを初めて知り、蓮の花が大好きになった。その時の香りと感動が、今でも心に残っている。

この本は、食中植物の専門家である木谷美咲さんが、世界中の植物園を美しい写真と解説で

篠崎図書館スタッフが選んだ
おすすめ本を紹介します

紹介した本である。彼女が初めて訪れた植物園が「熱川バナナワニ園」だったと前書きにあり、一気に心が通じ合った気がしてページをめくり始めた。

それぞれの植物園について短文と3つのポイントでテンポよく紹介されており、その文章にはたっぷりと植物への愛が感じられる。これまで植物園に縁のなかった人でも、つい興味を持ってしまいそうである。

鮮やかな色彩の写真はどれも美しく、目が覚めるようだ。天気の良い日に、自然の中を散歩しているような、ゆったりとした心持ちになってくる。植物はもちろん、斬新なデザインの建物の写真もあり、建築に関心のある方も楽しめると思う。

眺めているだけで、世界中の植物園に行った気分になれるような本である。私も、まだ見ぬ世界の植物園を巡ってみたいとなった。きっと素晴らしい体験ができるに違いない。

編集後記

体重は落ちてきたので、今年は体を絞っていこうと思います。(風雲ふわふわ丸)／霜柱の当たりはずれって、踏んでみるまで分かりませんよね。(モソ)／冬芽を見るのが寒い季節の楽しみのひとつ(ぱるめりん)／お餅に食べすぎはありません(たてじま)／今年は自分の時間をゆっくり楽しみたいです。(すずの木)

編集・発行：江戸川区篠崎図書館
住所：〒133-0061
江戸川区篠崎町7-20-19
篠崎文化プラザ内
TEL:03-3670-9102
[しのぎ文化プラザHP] 内篠崎図書館ページ
<https://www.shinozaki-bunkaplaza.com/library/>

ツイッター
やっています！



図書館報★篠崎 ぶらっつ

072号



篠崎図書館館長が
みなさんにお伝えし
たい事を記します。

地震雷火事親父といえば、世の中の怖いものを順番に並べたものと言われていますが、江戸川区に関わる者にとっては、台風もしくは水害を忘れることはできません。

今年のNHK朝ドラ『おかえりモネ』では気象予報士が生活の困りごとを解決しようと試みていました。現在、水害はある程度予測できるようになってきています。今

後、技術が進み、量子コンピュータなどを活用できれば、天気予報はより確度を増してくると思われます。

『おかえりモネ』でも、気象情報が得られた時にどのように行動するかで結果が変わる例がいろいろな形で示されていました。リスクが示されたら、すぐに動けるように日頃から準備をしておくことが大切です。

江戸川まいにんぐ 発掘 第72回

篠崎浅間神社

今回ご紹介するのは、篠崎地区の鎮守である篠崎浅間神社です。篠崎駅から徒歩15分、上篠崎1丁目に鎮座する区内最古の神社です。最も美しい神様といわれている^{このはなさくやひめのみこと}木花開耶姫尊が御祭神に祀られています。

創建は平安時代、天慶元年(938年)といわれています。一説によると、はじめは篠崎4丁目79番地あたりにあったとか。ある年大風で神札が飛来し、現在の上篠崎1丁目に留まったのでここへ移ったと伝えられています。

承平2年(932年)、下総弥山から^{やま さ な ひ}弥山佐奈比がこの地に移住。^{注1}神人として仕えました。のちに平定盛が将門平定と関東の平安を祈願し、ここに霧島神社を祀り、^{注2}金幣と弓矢を奉納しました。その時が天慶元年(938年)5月15日であり、神社の創建といわれています。やがて文化文政の頃には、参拝者も増え講社も組織されました。明治7年(1874年)郷社に昇格し、終戦後は^{注3}「宗教法人浅間神社」として現在に至っています。

江戸川区内のイベントやスポットについてスタッフが調査して身近な情報をお届けする地域密着型のコーナーです。

境内社は13社もあり、大きな木々に囲まれた心地よい静寂が感じられる神社です。新年の「篠崎図書館読書おみくじ」もこちらでご祈禱いただいています。

注1 ①神通力を得た人。②神官、かんぬし。

注2 ①金貨幣。②金色のぬさ。

注3 旧社格の一つ。府県社の下、村社の上に位する。

参考資料

『江戸川区の史跡と名所』

江戸川区教育委員会事務局生涯学習課文化財係編

江戸川区教育委員会 K1-29 篠崎ほか所蔵

『江戸川区史跡散歩』

内田 定夫著 学生社 K1-29 篠崎ほか所蔵

『篠崎むかし昔』

茨木 清美著 江戸川区青少年委員会鹿骨地区部会

K1-38 篠崎ほか所蔵

東京都江戸川区篠崎浅間神社ホームページ

<http://shinozaki-sengenjinja.or.jp/index.html>

地震雷火事親父



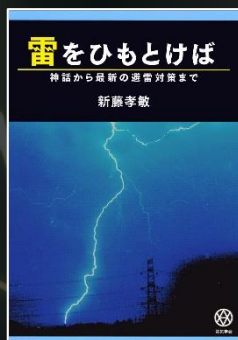
どれもこれも、なんてこわいのでしょう！
……だけど中には、意外な一面を発見
できるものもあるかもしれません。
※こちらで紹介した資料は今号配布期間中
「ぷらっつ☆篠崎コーナー」に展示しています。



日本の火災

伊藤 克巳解説・著
イカロス出版
369.3ニ
篠崎ほか所蔵

関東大震災から2017年に発生した埼玉県アスフル倉庫火災まで。大正から平成に日本で起きた主な大火の出火日時や被害状況、原因などを紹介。当時の報道写真で火災の状況や消防士達の奮闘を知ることができる。「マッチ一本、火事のもと」というが、火事は本当に怖い。



雷をひもとけば

新藤 孝敏著
電気学会
451シ
篠崎ほか所蔵

雷とは何か？ 冬にセーターを脱ぐとパチパチと音がすることがあります。この放電という電気現象、これを数kmに渡って起こす「巨大な放電」が雷です。自然の偉大な力である雷。その発生のメカニズムや、現代の情報化社会への影響、また神話から最新の落雷対策まで幅広く解説します。



雷文化論

妹尾 堅一郎編著
慶應義塾大学出版会
451セ
篠崎ほか所蔵

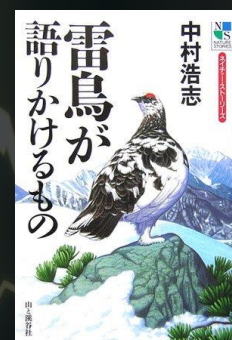
雨でも風でもなく、稲光や雷鳴に遭遇すると特別にドキリとする。この気持ちは古今東西多くの共感を得られるようです。雷が超自然的な現象だと捉えられていた時代や、落雷のほとんどない地域など、世界中の様々な歴史や文化の中での、人と雷の関わりを解説します。



図説地震と人間の歴史

アンドルー・ロビンソン著
柴田 譲治訳
原書房
453ロ
篠崎ほか所蔵

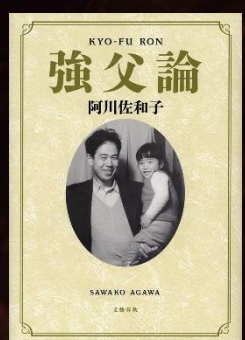
長い年月の間に、人類は幾度となく地震に遭遇してきました。大地震は社会や文化に大きな影響を与え、その度に人々が得た教訓は様々です。人が地震をどのように捉え、関わってきたのかを科学と文化の面から解説し、その歴史から今後の地震へ対策を考察します。



雷鳥が語りかけるもの

中村 浩志著
山と溪谷社
488ナ
篠崎ほか所蔵

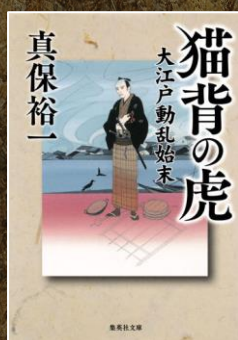
古来、日本の山岳信仰と結びつき保護されてきた雷鳥。『「電の気」感じて鳴き、鳴き終わると夕立になって雷が鳴る』などの逸話があり、実際に天気の良いときに姿を見えます。各国に生息する雷鳥の生態や日本の雷鳥の特殊性、環境破壊や地球温暖化の影響についても問題提起しています。



強父論

阿川 佐和子著
文藝春秋
910ア
篠崎ほか所蔵

亡父・阿川弘之の我儘エピソードがてんこ盛り。家族はたまったものじゃないだろうが、はたから見ると笑ってしまう。お気の毒さまというべきかもしれないが、お父さんとの思い出があふれるほどある著者がうらやましい。しばらく顔を見ていない父に会いたくなった。



猫背の虎

真保 裕一著
集英社
BFシ
篠崎ほか所蔵

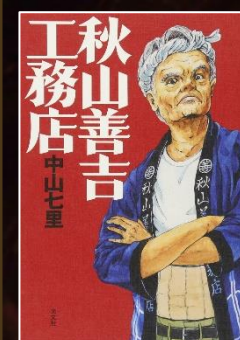
大地震に襲われ、混乱をきたす江戸。長身で猫背の南町奉行の同心・太田虎之助は人手不足のため臨時の市中見廻り役に抜擢される。赤ん坊の神隠しや風聞騒動など数々の事件を、岡っ引きや家族の力を借りて解決していく。少し頼りないが、やる時はやる虎之助の活躍をお楽しみあれ。



大名火消し ケンカ十番勝負！

土橋 章宏著
角川春樹事務所
BFT
篠崎ほか所蔵

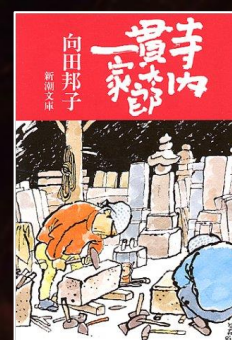
亡き母と自分を捨てた父を「一発殴ってやろう」と江戸に出てきた19歳の拓蔵。しかし、父は去年の火事で落命、伝説の火消しとして尊敬されていた。腑に落ちないままに父と同じ火消し・加賀鳶の一員になった拓蔵は、喧嘩と火消しに精を出しながら、次第に父の死の真相へと近づいていく。



秋山善吉 工務店

中山 七里著
光文社
Fナ
篠崎ほか所蔵

火災で家と夫を失い、義父善吉のもとで暮らし始めた秋山家の妻子。新生活はトラブル続きだが、善吉に助けられ活路を見出す。善吉の家族を守る行動は胸のすく見事さである。善吉の男気と妻子の成長、そこに火災原因をめぐる謎解き要素も加わり読み応え抜群。



寺内貫太郎一家

向田 邦子著
新潮文庫
BFム
篠崎ほか所蔵

東京谷中で石材店を営む貫太郎は不愛想で口下手、おまけに癩癩持ちで口より先に手が出る始末。そのくせ涙もろくて家族を大切に思っているが、そんなことは照れくさくて言えない。長女の結婚話も何だか訳ありで……。涙あり笑いありの寺内貫太郎一家、昔はこんな親父ばかりでした。